

## KALRO機構長が来日し、学術交流協定を締結

農国センターと2005年以来協力関係にあるケニア農畜産業研究機構（KALRO）のキレガー機構長が、本学トランスフォーマティブ生命分子研究所（ITbM）の招聘により、8月25～29日に来日しました。キレガー機構長は、8月26日および27日に名古屋大学を訪れ、松尾総長らとの懇談、関係部局への表敬訪問、KALROと共同研究を行っている関係者との打合わせ、名古屋大学に留学中のケニア人学生との意見交換などを行いました。8月27日には、名古屋大学とKALROとの間の学術交流協定調印式が開催され、理事、副総長ならびに関連部局長出席の下、松尾総長とキレガー機構長により覚書への署名が行われました。生命農学研究科、理学研究科、農国センター、ITbM、生物機能開発利用研究センターおよびアジア共創教育研究機構から共同申請された本協定が締結されたことにより、本学とKALROとの研究教育における協働活動が一層活発化し、より広範囲にわたる展開に発展することが期待されます。

その後、キレガー機構長は、8月28日に横浜で開催された第7回アフリカ開発会議（The Seventh Tokyo International Conference on African Development: TICAD7）のプレ大臣会合「Africa-Japan Ministerial Dialogue Meeting on STI for SDG」に参加し、科学技術を通じたアフリカにおけるSDGsの実現のための国際共同研究の優れた事例として、農国センターも参画している、アフリカの穀物生産に深刻な被害を引き起こしている根寄生雑草「ストライガ」の制御技術確立を目指す共同研究について、伊丹ITbM拠点長と共同で報告しました。

（楨原大悟）



調印式の様子（キレガー機構長と松尾総長）

## カンボジアにおけるJICA草の根技術協力事業の終了

2014年9月より実施してきたJICA草の根技術協力事業「カンボジアにおける農作物・加工品の安全性向上プロジェクト」は、2019年8月末日にて終了を迎えました。本事業では、カンボジア王立農業大学（RUA）とともに「米蒸留酒」と「野菜」の安全性向上に取り組んできました。5年間で85軒の酒造農家と116軒の野菜農家が技術を習得したほか、メタノール混入の危険性を周知する研修に5州の1,217名が参加しました。また、カンボジア農林水産省で食の安全性を掌る農産局の職員が安全な米蒸留酒の製造方法やメタノール検査方法を取得するなど、RUAのみならず現地政府の能力向上にも大きく貢献してきました。

7月30日には、この事業に従事したスタッフが集合して、指導した酒造農家が生産したコメ蒸留酒でできた「スラータケオ」を片手に慰労会を開催しました。「あの活動は大変だったけど楽しかった」などと、昔の話に花が咲きました。今では大学教員、農林水産省職員、民間企業、酒造会社の経営や農場経営など、皆さん様々な立場で自国の農業に貢献しています。技術を習得された農家さんも大きな成果ですが、この事業に携わった多くのRUA卒業生が、自国の農業を支える人材に成長したことも大きな成果であったと感じるひとときでした。多くの皆さまの力を借りて本事業の成果を出すことができましたこと、この場を借りてお礼申し上げます。（伊藤香純）

